

武蔵野日曜集会

一粒の麦

——ヨハネ伝第12章12～36節——

1968年3月10日

小池辰雄

棕櫚の日曜日 栄光を受くべき時 一粒の麦地に落ちて死なずば 破我 キリストの破れそのもの 神・キリストの本願の効力 天生天活 四位一体 我に事えんとせば我に従え されど我この為にこの時に 即キリストの現象体 光の子とならんために 聖霊の力

【ヨハネ12】

12 明くる日、祭に^{きた}来りし多くの民ども、イエスのエルサレムに^{きた}来り給うをきき、¹³ 棕櫚^{しゅろ}の枝をとりて出で迎え、『ホサナ、讃^ほむべきかな、主の御名によりて来る者』イスラエルの王』と呼^よわる。¹⁴ イエスは小驢^{ろば}馬を得て之に乗り給う。これは録^{しる}して、¹⁵ シオンの娘よ、懼^{おそ}るな。視よ、なんじの王は驢馬の子に^{きた}来りて来り給う』と有るが如し。¹⁶ 弟子たちは最初これらの事を悟らざりしが、イエスの栄光を受け給いし後に、これらの事のイエスに就きて録されたと、人々が斯^かく為^なししを思い出^いだせり。¹⁷ ラザロを墓より呼び起こし、死人の中より甦^{よみが}えらせ給いし時に、イエスと偕^{とも}に居りし群衆、証^{あかし}をなせり。¹⁸ 群衆のイエスを迎えたるは、斯^かる徴^{しるし}を行^い給いしことを聞きたるに因りてなり。¹⁹ パリサイ人^{びと}ら互に言う『見るべし、汝らの謀^{はか}ることの益なきを。視よ、世は彼に従えり』

²⁰ 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人ありしが、²¹ ガリラヤなるベツサイダのピリポに^こ来り、請^こいて言う『君よ、われらイエスに謁^{まみ}えんことを願う』²² ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。²³ イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。²⁴ 誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果^みを結ぶべし。²⁵ 己が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。²⁶ 人もし我に事^{つか}えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事^{つか}うる者もまた居るべし。人もし我に事^{つか}うることをせば、我が父これを貴び給わん。²⁷ 今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。²⁸ 父よ、御名の栄光をあらわし給え』爰^{こゝ}に



天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復またさらに顕あらわさん』²⁹ 傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆いかづち鳴れり』³⁰ と言ひ、ある人々は『御使かれに語れるなり』³¹ と言う。『イエス答えて言ひ給う『この声の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。』³² 今この世の審判さばきは来れり、今この世の君は逐い出さるべし。』³³ 我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許もとに引きよせん』³⁴ かく言ひて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給へり。群衆こたう『われら律法おきてによりて、キリストは永遠に存な給うと聞きたるに、汝いかなれば人の子は挙げらるべしと言うか、その人の子とは誰なるか』³⁵ イエス言ひ給う『なほ暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒くらきに追及おいづかれぬように為よ、暗き中を歩む者は往方ゆくへを知らず。』³⁶ 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給へり。

●棕櫚の日曜日

¹² 明るる日、祭きたに來りし多くの民ども、イエスのエルサレムに來り給うをきき、¹³ 棕櫚しゅろの枝をとりて出で迎え、

マルコ伝によるとこれがちょうど安息日、日曜日に当たるので、それで「棕櫚の日曜日」なんていうんです。復活の日曜日の一週間前の日曜日です。その金曜日に十字架にかかつて、その次の日曜日に甦よみがえったというわけですから。

『ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者』イスラエルの王』と呼よばわる。

これはこの通りではないけれども、詩篇118篇25、26節あたりに似た句が出ていて、そこからきているといわれている。「ホサナ」は、

「ホシユアナ」「イエホシユアナ」

という「救い」という字で、讃美の言葉です。「棕櫚の枝」は勝利の象徴ですから、「メシヤ王」としてキリストはみんなに思われた。しかし、旧約的なメシヤ王というのは地上に神の国を建設する王様と――ユダヤ人は今でもそう思っていますから――そういう角度で讃美していた。これはローマ帝国に対する政治的な反対の意図を持つから、当然、政治犯式に考えられるわけで、メシヤとか何とか言われることは非常にキリストにとっては危険であつた。

ところが、キリストがメシヤであるということは、キリスト自身においては全然別な次元のことです。それがユダヤ人にはわからない。イスラエルの王ではない。彼は全世界の霊的な王者である。

¹⁴ イエスは小驢馬ろばを得て之に乗り給う。これは録しるして、¹⁵ シオンの娘よ、懼おそるな。視よ、なんじの王は驢馬の子に乗りて來り給う』と有るが如し。



これは不思議な言葉ですね。旧約聖書のゼカリヤ書9章9節に出てくる言葉です。半ば默示的な預言書ですけれども。

「9 シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼われ、

「シオンの女よ」とか、「エルサレムの女よ」というのは同じことです。「女よ」というのは、「市民たちよ」ということを「女よ」と言う。

視よ汝の王汝に来る。彼は正義しくして救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち

驢馬の子なる駒に乗るなり。10 我エフライムより車を絶ちエルサレムよ

り馬を絶ん。戦争弓も絶るべし。彼国々の民に平和を諭さん。その政治は海

より海に及び河より地の極におよぶべし。」(ゼカリヤ9:9～10)

アラビヤの海から地中海のことを「海より海」という言い方をする。「河より河」といって、チグリス・ユーフラテスからナイル河のことをそういう言い方をすることもある。9節から10節は終末的な神の国の預言のひとつと言われるわけです。そこに平和の象徴として、羊とか驢馬とかいうのは優しい動物ですから。

「シオンの娘よ、懼るな。視よ、なんじの王は驢馬の子に乗りて来り給う」

と。確かにイエスはこの旧約の預言の言葉を自分にあてはめて驢馬に乗られたわけですよ。不思議な具合にそういう驢馬が備えられてあったから。まだ人が乗ったことのない驢馬です。そういうメシヤ王を出迎えた民衆とイエスの、そういった情景を思い浮かべて読んでいく。

16 弟子たちは最初これらの事を悟らざりしが、

なぜ、こんなことなんでしょうかと。かえってこの弟子は、近い者はかえって燈台下暗しというわけだ。

イエスの栄光を受け給いし後に、

即ち、十字架にかかって復活して昇天されたそののちに、

これらの事のイエスに就きて録されたと、人々が斯く為ししとを思い出だせり。

なるほど旧約にこういうことがあったし、それでみんながこうしたんだなということを、あとからおくればせながら悟ったというわけです。

17 ラザロを墓より呼び起こし、死人の中より甦えらせ給いし時に、イエスと

偕に居りし群衆、証をなせり。

このラザロの復活を目撃した群衆は、民衆は、

「これはメシヤだ」

と言って、こういう迎え方をした。だから、弟子よりも先にイエスをメシヤとみたわけです。しかしながら、そのメシヤの内容はちがってましたけれども。とにかく、こういった迎え方をしたのはその証なんだというわけです。



¹⁸ 群衆のイエスを迎えたるは、^か斯る徴^{しるし}を行^しい給^{たま}ひしことを
「^か斯る徴^{しるし}」というのは、死人の甦^{よみがえ}りをなしたこと。

聞きたるに因りてなり。¹⁹ パリサイ人ら互に言う『見るべし、汝ら^はの謀^{はか}るこ
との益なきを。視よ、世は彼に従えり』

だいぶキリストにみんななびいていて、

「これはどうにもならん。どうしてもキリストをやっつけなくてはいかん」

というわけです。この前に読んだおわりのところにも、

「祭司長らラザロをも殺さんとはかる」

とあったでしょ。こんなものを生かしておくと、なおさら評判になるから、あれも結局は死んだとかなんとか言つて、偽りの証言でもしようと思つたんでしょう。いわゆる正統派が、正統信仰者といわれるものが本当の神の国を現していく人たちを異端視することは、もうキリスト教の歴史がそれを何回も表しています。

● 栄光を受くべき時

²⁰ 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人ありしが、²¹ ガリラ
ヤなるベツサイダのピリポに來り、請いて言う『君よ、われらイエスに^{まみ}謁^{まみ}え
んことを願う』

即ち、異邦人が今度は、ユダヤ人ばかりではなく異邦人、ギリシア人が注目し始めたという。

²² ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告
ぐ。

こういうわけで少しあなたのことを聞く人が異邦人にありますがと。

²³ イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。』

いよいよ、十字架・復活・昇天というときがやってきた。自分が過越の最中に、金曜日に十字架にかかることは、もうちゃんと予見しておられるわけですから。

²⁴ 誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在
らん、もし死なば、多くの果^みを結ぶべし。

この24節は新約聖書、キリストの言葉の中でもまた大事なものの一つであります。今日は
その「一粒の麦」というわけです。

²⁵ 己^{いのち}が生命^{いのち}を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之
を保ちて永遠^{とこしえ}の生命に至るべし。

「永遠の生命に至るべし」という訳は、

「永遠の生命の中へと」

という言い方をしますから、それで「至るべし」という訳し方になっている。結構です、
その訳は。



26 人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、我が父これを貴び給わん。27 今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。

この「されど」が引っくり返してしまう。この「されど」が非常に強い「されど」です。

28 父よ、御名の栄光をあらわし給え』爰に天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復さらに顕さん』29 傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』と言ひ、ある人々は『御使かれに語れるなり』と言う。30 イエス答えて言ひ給う『この声の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。31 今この世の審判は来れり、今この世の君は逐い出さるべし。32 我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』

「今、今」と言つて、これもまた非常に強いです。

33 かく言ひて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給えり。34 群衆こたう『われら律法によりて、キリストは永遠に存え給うと聞きたるに、汝いかなれば人の子は挙げらるべしと言うか、その人の子とは誰なるか』

全然わからなくなつてしまった。

35 イエス言ひ給う『なお暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ、暗き中を歩む者は往方を知らず。36 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給えり。

もう実に、キリストの言葉はちつとも紆余曲折がなくて、ズバリズバリと言つておられる。とにかく、聖書というのはズバリと受けとつていかななくてはいかん、三段論法なんかではなくて。

●一粒の麦地に落ちて死なずば

23 人の子の栄光を受くべき時きたれり。

と。23節ですね。「人の子」は、いうまでもなく、ただ人の子ということではなくて、「メシヤ」という言葉の隠語であります。

24 誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。

麦が文字通りに死んでしまえば、どうにもならんですよね、枯死してしまつたら。この「死ぬ」というのは、枯れて死んでしまうということではもちろんない。それではどういうことか。この「麦」というのは小麦ですが、麦の原産地は大体、西南アジアだそうです。西南アジアからエジプト、それから小アジアにかけて。それも、「一粒麦」というのと、「二粒麦」



というのがあるそうだ。しかし、この場合の「一粒の麦」というのは、いわゆる種類の上での「一粒麦」ということではないと思いますけれども。とにかく、一粒の麦――「一粒の芥子種^{からし}」というのがありましたね。あれと同じように――一粒の麦、麦一粒。私たちはみな個体、一個の人間ですが、植物でいうと、一人びとりが「一粒の麦」というわけだ。キリストはの場合にももちろん、この「一粒の麦」とは自分のことを言っておられるわけです。

「この私という一粒の麦が地に落ちて死なないならば、十字架でいつぺん死なないならば、そのままだ。もし、死んだらば、多くの果^みを結ぶ」という。

私の兄は27歳で仆れましたが、この兄が私にとつてまさに「一粒の麦」であつた。彼が死んでから、私の目が覚めたわけです。親戚はたくさんいますけれども、兄の死が作用したのは私だけです。私を通して母にもいきました。それからこの集會に27年間出入りなさつた方々に何らかの作用をしたかと思ひますけれども。とにかく、私個人の経験としては、「一粒の麦」と言われると、私は兄のことを思ひざるをえない。正直、死にましたけれども、しかし、その死が死ではなかつた。

●破我

「麦は地に落ちて死ぬ」

という表現でキリストが言っているのはもちろん、麦という一粒が殻^{から}を破る。「破我」なんという言葉はないでしょうけれども、我を破る。己を破つて、己の殻を破つて、そして、まず根が生える。それから、芽が出る。そして、たくさん粒がここにできるといふわけです。

この自分というものが破れる。キリストは生命を与えるために己を捨てた。そのすぐあとの方にも、

25 己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。

「己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に入つてくぞ」

と。「之を保ちて」という言い方がちよつとおかしいけれども。これは、相変わらず生きるのではない。これは正に変わつていく。永遠の生命に實質変貌していくわけです。

私たちは自分という殻が、自我という殻が破れなくては。自我という殻は自分で破れない。ここに罪という問題があるわけです。即ち、我執^{わしよく}というやつ。破れないということは自分に囚われている。その囚われの身なんだ。ところが、パウロは、

「我はキリストに囚われたる人、キリストの囚人」



と自分のことを言った。自分に囚われていないで、キリストに囚われている。パウロはやはり素晴らしいですよ。

「キリストの囚人、キリストの捕虜だ。キリストに囚われたる者」

と。ところが、私たちは、生来の私たちというのは自我に、自分に囚われている。

そして、キリストは自分に囚われてないから、自分は何でもないから、無者と言いました。仏教ではよく「空」とか「無」とか言いますが、空の事態。

仏教でもやはり、「至誠心^{しじょうしん}」という言葉がある。「至誠心」というのは、自分に囚われない、無私の心。みんな同じことです。本当に破れば、そういうことになる。空と言おうが、無と言おうが、無私と言おうが、至誠心と言おうが、無心と言おうが、「無心の心」と、鈴木大拙さんも言っている。

この極限の、自分というものが抜けてしまった本当の純粹な――ベルグソンの言葉でいうと「純粹意識」というもの――その純粹なる、囚われざる意識の世界。それをもうひとつ言うと、深層意識と言ってもいい。自分でもはや省みるところのない一番奥の深層の――省みたらそれはもう二次的なことになる――一番囚われないところの、何とも説明のできない世界です。そういうところに、人間は――まあ非常に常識的な言葉でいうと「良心」というんだが、「良心」という言葉ではまだちよつと弱いけれども――まあ誰でもあるんです、それはどんな人でも。

孫に智子という子どもがいる。ああいう何でもない半歳の子どもがニコツと笑ったり、無心に眠っている姿を見ると、私はそこに神を見る。神はどのこののなんていうことを、神があるとかないとか、そういうことを頭で言っているうちはダメです。そういうことがはつきり私は、日常のそういうちよつとした現象でパツとわかる。

即ち、それは神的な何ものかがそこに現象している。現象学ではないけれども。そういう現象においてパツと本体を、本体の世界を、私たちが五感でもって感ずることのできない本体界を、現象においてパツと悟る、見る、聞く。パウロが、

「万^{よろず}のものを貫いて、その中にある」

と大胆に言いました。いわゆる「汎神論」とか何とか論なんてことを言う必要はない。

皆さんの中にもみな神的なものがある。全体としては人間は、「罪びと」ということは言いますけれども、にもかかわらず、神的なものを神さまは置いている。にもかかわらず、全体としてはダメだという情けないはなしですけれども。

誰でもが人間であるかぎり、その至誠心というのが、無心の世界というものがあるわけだ。ただそれが決定的な実力を持たないからしょうがない。それをもう、何と云いますかね、人間というものは全然ダメだと頭から数学的に否定してしまうのと、この心の世界の真理というものはそういうものではないと私は思う。けれども、また一面において、どうにもしようがないやつだという面もある。そういうった割り切れないところの矛盾構造である。



●キリストの破れそのもの

私たち、「一粒の粒」というやつ。せっかく大事なものが置かれているのに、殻が覆ってしまっている。この大事なものが上からの、外からの養分、光を受けとって――これは自然現象でいえば、土の中で殻が自然に破られていくわけでしょ――自然に破られて、根が生えて芽が出るわけだ。

私たちの個体でいうならば、福音にぶつかって、そしてこれが観念で受けとられているうちはまだある程度は浸透していても本当の破れにこないわけですね、観念信仰では。ところが、この聖霊の光が迫って、神の言が、

「わが言は霊なり生命なり」

というこの聖書の言が本当に霊として生命として受けとられていくような角度になると、これが破られる。その破れの決定的なことをするものは、キリストの破れそのものです。キリストの破れそのもの。

「私は十字架でもって自分を、自分というこの一粒の麦を今に十字架でもって破ってしまふ。それはこの破れを通してお前たちに本当の破れと本当の生命を与えるための破れだ。」

と、キリストの破れは。キリストは自分を十字架にかけて破って、そして、

「お前たちは、自分で破れないその殻を十字架で破ったんだから、受けとれ」

と。もうそこをはたと

「はい」

と、全存在をもって、「はい」と受けとるほかにないわけです。これは考えたって結論は出てこない。考えて理屈で結論が出て、

「それではひとつ……」

なんていうようなものはひとつも力の世界に入らない。

この率直に受けとっていくものを「信」というんです。それまでは大いにやったらいいですよ、自分で破れるなら破ってみたらいい。今の世の中は自我主張が極度に恐ろしいことになってきた。もうイデオロギーではダメなんです、この世の中は。イデオロギーのぶつかりではもうどうにもならん。これは世界がそれこそ本当に破れてしまふ、イデオロギーとイデオロギーがぶつかったら。イデオロギーの自己主張をやっていたら。

もうひとつ上の世界に人間が、自分のイデオロギーを破って出てこなければ、世界は平和にこない。学校問題もみんなそうです。この宗教的な境地が青年には絶対に必要です。単なる学問くらいなことではダメです。学問をして学問たらしめる、もうひとつ奥の世界にこなければ。そういうもうギリギリのところは現実には来てしまっている。人間の魂というものは、それだけの破れの世界を通っていかなければ、パウロの本当に小さきひとつのものを深く顧みるようなものは出てこない。今の現実はどう冗談じゃない。



エレミヤが、エレミヤ記4章19節で、

「¹⁹嗚呼わが腸よ我腸よ、痛苦心の底におよび、心胸とどろく、われ黙しがたし、我が靈魂よ、汝らつばの声と軍の鬨をきくなり。²⁰敗滅に敗滅のしらせあり、この地は皆荒らされ、わが幕屋は頃刻にやぶられ、我が幕は忽ち破られたり。²¹我が旗をみ、らつばの声をきくは何時までぞや。²²それ我が民は愚かにして我を識らず、拙き子等にして曉ることなし。彼らは悪を行うに智けれども善を行うことを知らず。²³われ地を見るに形なくして空しくあり、天を仰ぐにそこに光なし。」(エレミヤ4・19～23)

という、エレミヤのこの熱望の幻の預言。そういうようなのが浮かんできますよね。人間そのものの改造をしていかなければ。社会問題も、いや、政治も経済も教育も一切の問題が、人間の改造というギリギリのところにきている。

●神・キリストの本願の効力

私たち自身が本当にこのキリストの破れ、十字架の破れを、十字架の碎けをいただいて、そして破れるときに初めて今度は、本ものが入ってくるからです。海だっているような滋養分が入ってくるから、太陽熱を間接的に受けているから。そういうようなわけで、外から、御言、御霊、靈言一如の事態が私たちの魂の生命となってくるから、そこで、私たちの魂が永遠の生命へと変質変貌していく。破れなければダメです。外側から、外から本ものを受けとらなければダメなんです。神・キリストの本願の効力を受けとらなければダメ。

「至誠心」の奥に、「深心」というのがある。深心という表現をしている。それから、「回向発願心」とか。ここで初めて発願するわけだ。願を発する。向きを変えて発願する。本願に対して発願心が湧いてきたら、これが芽を吹き出すという、仏教の方でもそういう言い方をしている。私心無き境地はいいけれども、まだそれは消極的状态です。それから動き出さなければ。深い心の一番深層意識の——心理学的にいうと——その深層意識の心のところに今度は発願心が起きて、これが宗教の世界です。この発願心が起きたところ。この回向発願心が起きて、弥陀の本願に応ずるところです。

冗談じゃないよ、「宗教、宗教」なんて言って敬遠していたら、「己の命を救わんとself主張しているやつはみんな死ぬよ。ダメだよ、亡びるよ。お互いに争ってお終いだよ」

と言うんだ、キリストは。

「けれども、この自我、自我心を憎むものは、己が心を憎むものは「心」というのは自我心だ。

この自我心を憎むものは、永遠の生命へと展開していくぞ」

と。「人間形成」なんて言ったって、自我心を形成したら、とんでもないものになる。もう



この辺で日本の教育も根本的にメスを入れて、小学校から大学まで教育者がそれだけの自覚を必要としているんですよ。病膏盲^{こくもう}に入ってしまったな。なにも教育者に限らない。どのようなところにおいて働いていらつしやる方でもみな同じことであります。

● 天生天活

ただ地上の生涯が終ることを「死ぬ」と言っているのではない。今、我々がこうやっていながら、本当に死んでかからなければいかん、自分に。パウロが、

「キリストの死を帯び、キリストの生命を受ける」

とコリント書簡の中でも言っているとおり。死んでかかっていく。そうすれば、私たちはもう地上において既に――こんな言葉はないけれども、天的生命に――天生^{てんせい}しているわけだ。地に死んで天に活きる。天活^{てんかつ}という。そして、

「多くの果を結ぶ」

という。あなた方一人びとりが、死んで、

「私はもう死んでいる人間だ。しかし、本当に生きている人だ」

ということが、この十字架のキリストと復活のキリストを御霊でもって受けとっていれば、これがはつきり言えるわけです。

皆さんがどこに在っても、人に接して動いているところ、それが即ち本当の伝道なんです。これはもう死に至るまで、皆さんは一人びとりが伝道者です。そのような死生^{しせい}の転換^{てんかん}の道を身証する人が伝道者であつて、口でものを言っているのが伝道者ではない。身をもつて証している人が伝道者です。

生命というものは生命によらなければ伝わらない。生命は生命によらなければ。本当の生命を人に与えようと思ったら、自分自身が本当の生命をそこに発現していなければダメ。その生命の発現の仕方はいろいろ千変万化です。あるときは深い細やかなる愛としても発現するし、あるときはもの凄い戦闘的な姿で発現することもあるでしょうし、それは様々です。

しかし、どれにしたところで、人を救いあげていく。人を救い上げてということにおいて変わりがない。人に生命^{いのち}づけていくということにおいて変わりのないもの。結局、極限の言葉は愛ということに帰します。

愛という言葉はあるひとつの何か決まったような現象体ではない。

キリストは私たちのことを、

「お前たちは神々である」

とさえ言われた。そのように、キリストの身証体です。三位一体とか何とかいいまして、

「父・子・聖霊」

を理論的に、



「キリストは神の子か、神か」

なんてやっているが、もうおかしくてしょうがない。パウロの書簡を読むと、パウロはひとつも論理的な神学なんて展開してない。彼は本当に有機体的な驚くべき神学を持っています。けれども、ひとつもそれを論理的にあとづけてはいない。論証してはいない。全部それは告白の形でもって。

パウロに限らず、聖書はみんなそうです。並べてみると矛盾したような言葉だが、実はちつとも矛盾していない。生命的有機体的なドラマチックな真理の把握をしなかったらば、聖書は本当につかめない。その意味においては、神学は――いわゆる神学は災いですけれども――しかし、本当の神学はそのようなものであるということを語っていく。それは本当の神学です。

どこにキリストほど神を表しているものがありますか。神の子であるとともに、子なる神であると言って一向差し支えない。それはあるときは、「子なる」をとってしまつて、「神」と言つたつて何ということはない。法然上人の姿を見て、合掌したくなるとすれば、法然において仏を見ているわけです。ただ人間法然というものを奉っているのでも何でもありません。

●四位一体

私たちは、そういう意味において、三位一体どころではない四位一体になつてしまう。この罪びとすらも、

「われと汝とは一つである。懼るるなかれ」

という「一つ」というのは、そういったような、贖いにおけるところの現実をはたと受けとつて、そして自分を乗り越え乗り越え、破り破つて進んで行く。これが、

「永遠の生命に至るべし」

という姿です。

「栄光より栄光に至り、遂にキリストの姿に化するなり」

とパウロが言っている。みんなこれは恩寵の、恵みの事態を告白しているんですよ。自分が偉くなったのでも何でもない。恵みの事態を告白してなんと素晴らしいかなと、聖名を讃えている姿です。これが、

「一粒の麦、地に落ちて破れないならば、ただひとつだけれども、もし破れてしまふならば、多くの果を結ぶ」

と。「死ぬ」という言葉をそうとつてくださいよ。なにか「死ぬ」という言葉を聞くと、死んでお終いみたいに思ったら困る。死ぬとは破れること。

「元来の自分なんていうものは片付けてます」

と。

「まだ片付きません」



なんて。はい、私もまだ片付きません。片付かないけれども、片付いていると。分かりますか。そういう恩寵の現実における「片付き」の姿でもって片付いている。

皆さんは大事な使命を帯びているんですよ。いい加減なことではないですからね。もうどこへ引っぱり出されても、どんなに相手にえらそうな人がいても、どうぞ、びくともしないところの御霊、御言の権威の人になってください。そのために私はこの集会をしているんだ。ここから出て行ったらダメだよ、本当に。それだけのことを私は言うだけの自信を持っています。そのかわり、もう本当につかまえたなら、どこへでも飛び出して行ってください。それはあなた方が今度是一粒の麦となつて多くの果を結ぶから。多くの果を結ぶだけの破れの麦にならないで、出て行つたつてそれはダメだよ。それは本当に破れてしまう。

●我に事えんとせば我に従え

26 人もし我に事えんとせば、我に従え、

この「従う」ということが今の人にできないんだね。すぐ何とか言つて、話し合いだとか相談だとか。まあ話し合いもいいでしょう、民主主義は。けれども、話し合いでもって本当の世界はつかめないんですよ、「従う」というその次元を持たないと。

何といったつて、この聖書一卷の展開しているドラマチックな真理は、そして特にキリストの霊言は、もう文句なしに降参して、文句なしに「はい」と自分の生活の中に受けとつていくことが、「従う」ということです。御言を受けとることが「従う」なんですよ。信頼すると言うならば、自分を投げ込むことが信頼なんです。

「気持の上で信頼してます」

なんて、そんなものは信頼でも何でもありません。みんなこの全的に捨てられてた姿なんです。従うというならば、本当に真つ正面に受けとる。信頼というならば、自分そのものをその中に投げ入れる。その気合がわかつてきたら従える。

わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、

我が父これを貴び給わん。

「仕える」とは、「人が士となる」と書く。主に対して士ごとく、臣下のごとくにある人のことを「仕える」という。私たちにとつてはキリストは主だもの。私たちは主に対しては臣、従だ。だから、「仕える」というのは正に――主を主として崇めるといふことはただ崇めて仰いでいるのではない――その意志に従っていることが「仕える」ということ。けれども、相手が絶対者ですから、パウロがこの「仕える」といふのは、正にパウロは奴隷となる。

「我はキリストの僕である。奴隷である。忠臣である」

と。そうしたら、パウロはもう本当の自由人になつた。もの凄いい自由人に。

これが何か、従うとか仕えるというと、昔の封建制度でもまた引っくり返すようなことを言っているかと。そうじゃないですよ、この福音の世界は。自我に囚われた自由なんて、



ひとつも自由ではない。そんなのは不自由でしようがない。そうしてもうガタガタガタ、しまいには行き詰まるだけのはなし。

されど我この為にこの時に

キリストも私たちの弱さをちゃんと身に知ってらっしゃる。

「今われ心騒ぐ」

なんて。人間キリストは、

27 今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、

と、キリストも。キリストなんてのは神の子だから、そんな変な祈りをしないかと思ったら、ちゃんと「この我を救い給え」と。「されど」と言つて、「この我」を引っくり返してしまつた。この「されど」が、我を引っくり返す、我を破っている「されど」です。あなた方も、「いな」と言つて自分を破つて進んでいく。

されど我この為にこの時に到れり。

「いや、冗談じゃない。私は正にこの為に、この時に来た。十字架を負わんがために今、ギリギリの、旧約聖書を全部破棄するところの事態に、アウフヘーベンするところの事態に今これから立ち向かう」

と。一人びとりの中にはもの凄いエネルギーがある。

エネルギーで、ちよつと思ひ出した。私は何かよく分からないけれども、プランクという人の、物理的な世界の一番最小の粒子の定数をHとかいうそうだ。このH定数を持っているところの一番極小の微粒子——これをやはり「空」と言つたつてもいいけれども——これは常に拡大し膨れようとしているそうだ。

だから、我々が極限状況の、さつき言つた、自分を本当に捨てた事態になると今度は、その真空的な状態はもの凄い爆発するような力を持つ。上から、外からのもの凄い力がきて、それでもつてこの真空状態のところ、核爆発を起こすように、一粒の麦がもの凄く展開して多くの麦にエネルギーを分かち与える。連鎖反応をそうやって起こしていくような、そういうようなわけであります。

だから、自分に執しているうちはいつまでたつてもダメ。自分をぶち破つて、

「このキリストの生命、キリストの霊を」

と言つて生きる人はぐんぐん伸びていく。学問をしようが、芸術をしようが、医学のことをしようが、会社の仕事をしようが、何をしようが、みんなそうです。

●即キリストの現象体

28 父よ、御名の栄光をあらわし給え』愛に天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復さらに顕さん』

「お前を通してたくさん栄光をあらわした。お前の言動はすべてわが栄光のあらわ



れであるぞ」

と神さまはそう言った。

「これから十字架を通し、復活を通し。今度は、天上から聖霊をお前を通してくだして、いよいよ、地の果てまでも世の末までもお前の生命は、神の生命は、わが生命は汝を通して展開するぞ」

というわけです。この生命の霊的な霊生の、霊的生命の展開力というものは、原子力とか何とかというところのさわぎではない。

いいですか、皆さん。根源の現実ではもの凄い現象があなたの方の五臓六腑の中に、存在そのものの中に常に起きながら進んで行く。即、キリストの現象体となっていくことです。私たちはキリストの現象体である。

29 傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』^{いかづち}と言い、
なんか知らんけれども、今、不思議な音が響いてきたと。

ある人々は『御使かれに語れるなり』と言う。

どうですか、分かりますか。キリストの祈りというものは何か霊的な波動をそこに巻き起こすような、天界からそういった霊的な声を起こしくだすような、そういう祈りですよ。

「父よ、御名の栄光をあらわし給え」

とキリストが祈れば、

「われ既に栄光をあらわしたり」

云々と言つて、声が響いてくる。

この祈りというものは、やはり祈りそのものが常に自分を破っている姿でなければ、祈りにならない。こういう祈りは。生命が乗り込んでくるんだ、「いのり」というのは。天来の生命がのりこんでくるのが「いのり」という。そういう祈り。それは今度は、沈黙でもその世界は展開する。沈黙の祈りでも。夜、床の上に端座して祈る沈黙の祈り。片手でこうやれば、キリストと合掌するような。そういう祈りの世界。自分で両手を合わせないで、キリストと手を合わせるなんてな気持ちで。

30 イエス答えて言い給う『この声の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。』

31 今この世の審判は来れり、今この世の君は逐い出さるべし。

「この世の君」はサタン。

32 我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』

これは愉快な言葉だ。

「私が十字架にかかって昇天したならば、今度はお前たちを本当にこの天界に引き寄せるぞ。また天界をそこに引きおろすぞ」

と。パウロが、

「私たちはもう既に天界にあるんだ」



というようなことをコロサイ書の中で言っている。

キリストの信仰の事態は、ここに「今、今」という言葉が二つ、それからあとにまた「今、今」が出てくるんだが、非常に「今」という世界ですから。「今」しかも「ここに」、

「今」ここにおいて」

ということ。

私はものを言いながら、あなた方は聞きながら、今ここにおいて、このヨハネ伝のこの事態が——キルケゴールの言葉じゃないが——同時的に来ているわけです。しかし、キルケゴールは同質ということと言わなかったようだが、同時であつてまた同質でなくてはいいかん。この現実と同質なものが、私たちは読みながら今ここに来ていいるから、もうサタンはうち勝たれる。

「キリストが在りたものがゆえに、いくらサタンに誘われても、サタンには決定的な勝利はないぞ」

と。キリストの引力に引き付けられている磁性を帯びた私たちですから。聖霊の磁性を帯びた私たちですから。どんなに揺れたって、必ず北を指す。東北だの東だのを指したら間違えてしまう。

●光の子とならんために

キリストは自分の弱さをこうやって、人間的な弱さをグツと出しながら——これがあるがたいことなんです——私たちが弱い者でありながら、このようにキリストに即するならば、何も恐いことはなかったということが、こういうキリストの「されど」でもって私たちは受けとるわけです。されど、このキリストのつかみかかり、このキリストの引力を誰が引き裂くことができるかというわけです。あなた方はそういう信の世界に入らないで、

「自分の信仰だ」

なんてやってたらダメですよ。

³³かく言いて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給えり。³⁴群衆こたう『われら律法によりて、キリストは永遠に存え給うと聞きたるに、汝いかなれば人の子は挙げらるべしと言うか、その人の子とは誰なるか』

キリストの言葉がまだ分からない。だから、

「永遠に存え給うと聞きたるに、汝いかなれば人の子は挙げらるべしと言うか」なんて言う。十字架にかかつて天界にあげられる、その十字架にかかることがちつとも分からない。まあ仕方がない。パウロが初めてそれを言ったんだから。

³⁵イエス言い給う『なほ暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ、』

「私は光だから」と言うんですよ、もちろん。



暗き中を歩む者は往方^{ゆくて}を知らず。36 光の子とならんために光のある間^まに光を信ぜよ』

「私がいなくなったら、いつペン闇がくる」

「それからまた本当の光がくる」

ということとはここでは説明なさらなかった。十字架から復活までは闇だ。天地晦冥^{かいめい}のときだ。一日半ばかり。それでもう失望落胆。天地晦冥^{かいめい}。暗澹^{あんたん}たる、暗黒そのもの。これは本当の暗黒だ。

ところが、その暗黒を突き破って、朝日が海のかなたから昇ってくるようなぐあいになる。私たちは、自分を殻でもって暗黒にしているその破れから今度は光がきますから。

「汝らは世の光なり」

と。殻の破れたものは「世の光なり」、私たちは光体である。反射しているのではない。それ自身が光体である。聖霊をいただかないで、光体であるなんて言ったって、それは観念で偽りです。クリスチャンでも、御言、聖霊がある程度作用している人はありますよ、外から。それは反射的クリスチャン。あなた方は反射的クリスチャンではダメですよ、それ自身が発光体でなければ。蛍みたいに。

●聖霊の力

ちよつと他の福音書を開いてください。マタイ伝16章24節から、

「24ここにイエス弟子たちに言いたもう『人もし我に従^{きた}い来らんとせば、己をすて、己が十字架を負いて、我に従え。25己が生命を救わんと思う者は、これを失い、我がために、己が生命をうしなう者は、之を得べし。26人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益かあらん、又その生命の代^{しろ}に何を与えんや。27人の子は父の栄光をもて、御使^{みつかい}たちと共に来らん。その時おのおのの行^{おこない}為^{した}に随^{したが}いて報ゆべし。』」(マタイ16・24～27)

これはやがてキリストが変貌の山でもって自らを顕す前に言われた言葉です。マルコ伝8章34節からの言葉も今と同じような言葉ですが。

「34かくて群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言いたもう『人もし我に従^{きた}い来らんとせば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え。35己が生命を救わんと思う者は、これを失い、我が為^{ため}に福音の為に己が生命をうしなう者は、之を救わん。』」(マルコ8・34～35)

と。それは、殉教の死ということももちろんその言葉の中にはありましよう。けれども、我々の日々の生活態度が、

「己が十字架を負う」



ということも、このキリストの十字架に負われてこそ負えるのであって、自分でもって力んだって負えない。

キリストの十字架に負われているということをもうひとつ奥から言うならば、もうひとつ先のキリストの生命をいただいているから、十字架が負える。聖霊の力がなかったら、十字架を負えないし、あれば必ず負えます。

だから、このキリストの言葉がそんなに苦しい言葉でなくなつて、いや実に――申し上げているとおり――担いの心、担いの本当に自分が担っていく心。

「この集会は私一人で担います」

という、一人びとりがその心で行くのが、これが

「十字架を負う」

という担いの心です。その一人びとりが担いの心で黙々とやっていくならば、それが本当に生命を、得るところじゃない、

「生命を与える」

ともまで言ってしまったいい。

「十字架を負っていく者は、永遠の生命を得るは人に永遠の生命を与えんがためなり」

と、そこまでキリストは仰つてないけれども。そういうわけですよ。永遠の生命というのは、与える生命であつて、ただ自分の確保している生命じゃないですよ。

すべて本ものは、苦しさの中にも必ず楽しさがあるものです、本ものの世界は。喜びがあるものです。だから、喜びの音信という。喜びの音信を受けたら、パウロがこんなに人に誤解され、迫害され、苦しめられ、牢屋にも入れられて、しかも、パウロは何と言っているか。

「喜べ、喜べ」

と言っている。彼は完全に突き抜けている。キリストでもう本当に楽しきの、

「この喜びを誰が奪えるか」

というパウロであり、ヨハネであり、ペテロであります。そういうことですから、もう聖書の言葉はどれもこれも、どんなにキリストが激しいことを言つても、

「ああ結構でざいます。その世界が実はもの凄い力の世界でありました」

ということを受けとれるようになってきます。では、今日はそこまで。

